

はあつても、小教区を構成する司祭、修道者、信徒、そして各種委員会など全てを含めたものはなかなか見つからなかった。その時に苦勞して作ったのが、現在の教会委員会の基になったものである。困ったのは絶対こうしなさいという指示はなく、アスキュー神父の話を聞きながら、何度も何度も草案を書き直したことであった。主任司祭の命令は絶対だけに、指示を仰ぐことに慣れていた自分にとって、その作業はいささか苦痛であった。信徒使徒職と言われても、司祭を補佐するという意味で、信徒の責任、役割という理解でしかなかったのを、アスキュー神父は、信徒も祭司職に与っているのだという誇りを持ちなさいと教えて下さったのである。とにかく忍耐強く、人の意見を良く聞かれ、最後に、短い意見を述べるという方であったが、険しい表情、怒った顔は絶対されたことはなく、絶えず微笑を浮かべておられたのである。

サラリーマンだった牧野神父と三人で福井に旅をした時のことである。当時福井教会の主任司祭であったアスキュー神父から、早朝ミサで聖櫃から取り出されたご聖体をいただいた時に、牧野神父が笑いながら「冷蔵庫に入っていたみたいで、ご聖体が冷たかった・・・」と感想を述べた時に、上記の表情をされたのである。私は牧野神父の、その瞬間的な感性に驚き、三十年も前の出来事なのに、ありありとその時の情景が甦るほど、深く記憶に刻まれていた。聖変化されたパンは、ミサに参加できない病者や、多忙な人にとって、本当に恵みのご聖体、信仰を養うユウカリスチアである。しかし、聖変化はミサの中心的な祭儀であり、当然ご聖体はミサと切り離すことが出来ないものである。パンがご聖体として特別なものとして賛美、崇敬される聖体降福式にはタンクトウムエルゴ サクラメントウムと歌いながらも、いささか違和感を持つて参加していた私にとつて、冷たい聖体という表現は、その違和感の正体を認識させてくれたのである。ミサが繰り返し、繰り返し行われるのは、最後の晩餐に招かれ、

イエスの臨在をたえず実感するためであろう。前述したように、ミサが出来ない緊急の時に、ご聖体をいただけるのは本当に有難いことであるが、ミサはご聖体をいただくのが目的ではなく、み言葉を聴き、説教を聴き、自分を捧げて、ご聖体をいただく、そうした一連の行為によつて復活された主イエスと一体となるのである。ご聖体はいただくものであつて、伏し拝むものではないと思う。いささか誤解を招く、過激な意見となつてしまつたが、アスキュー神父の困惑の表情には、こうした脱線気味

の考えを察知されたからなのだろうか…。

久し振りに行われた聖体賛美式に与つて、聖体訪問の意味、聖体の前での祈りによる特別なお恵みを知り、最後に御聖体での祝福を受けた喜びで自分の持つ戸惑いが少しずつ溶けていくのを感じた。改めてカトリックの信仰の深さ、伝統を思い知らされた一日であつた。ただ御聖体が信仰の分裂、プロテスタントとの融和の妨げになるのは、なんとも悲しい。

